

足立悦男著

文芸研選書 2

現代少年詩論

本書は、「新しい詩教育の理論」(明治図書)で「見方の詩教育」を主張された著者の現代少年詩に対する詩論である。足立氏は、前掲書において、「感じ方の詩教育」を批判的に検討し、新たに認識の側面から詩教育を扱えた「見方の詩教育」論を展開されていたが、本書もその立場から著者独特の鋭い分析によって現代少年詩を論じてある。

第一章 「子どもにとって詩とは何か」から一部を引用する。

「詩は散文にくらべて表現形式のうえで自由であるから、いろんな傾向があつていい。しかし、どの傾向の詩であつても、子どもの現実認識をゆさぶり、新しいものの見方や、新しいものごとの輝きを見せてくれるのではなければ、少年詩として成立しがたいのではないかと思う。(中略)傾向としてみれば、詩人みずからの子どもの時代を回想した詩集が、大人のノスタルジアを満足させることはあつ

ても、現代を生きぬく子どもたちを心の底から揺り動かすことはできないであろう。」

詩の題材を少年期にとつているから、即ち少年詩であるとは限らない。「子どもの現実認識をゆさぶり、新しいものの見方や、新しいものごとの輝きを見せてくれる」ものであつたとき、その詩は少年詩として成立する。

このような考え方を根底に据えた本書は、「子どもにとって詩とは何か」という問いを常に自らに課し、また読者にも問いを常に自らに課し、また読者にも問いかけてくる。

前述の第一章に続き、第二章では、「日常の狩人——まど・みちお論」「ノンセンス詩のセンス」「音の遊戯——ことばあそびの詩」「セックス・タブーの壁——子どもの性と詩」「他者の発見・私の発見」「記憶の装置——少年詩の中の戦争」「見えないものが見える——虚構のリアリズム」「童謡詩の現代——阪田寛夫論」さらに第三章では、「児童詩のアポリア——『しにん』論争」「跳べな

いイカルス——岡真史詩集『ぼくは12歳』という興味深いテーマで構成されている。

また、収められている詩も、児童詩四十一編を含む百三十一編と数多く、現代少年詩・児童詩のアンソロジーとしても読み進めることができる。

この書の大きな魅力は、やはり著者の詩に對する鋭い分析と解釈であろう。鋭利な刃物で切りとつたかのような解釈は、読者のものの見方や認識をゆさぶるものになつてゐる。また、提示された詩の何をどのように読みとれば良いかをつかみかねてゐる読者に、一つの明確な視座を与えてくれる。「見方の詩教育」を見事に実践している書と言つてもできるだろう。

「子どもにとって詩とは何か」または「授業で詩を扱うとはどういう営みなのか」という問題意識を持つ読者にとって、一つの解答を示してくれる好著である。

(A5版、一七六ページ、昭和六十二年、明治図書刊、一、八〇〇円)

(高野 英朗)